

東京大学工学部 正員。西野文雄
アジア工科大学 Seng-Lip Lee

1. まえがき

断面の広がりの影響を考慮した曲線ばりの解析には、開断面部材を取り扱った小西、小松、開断面の兩者を取り扱った倉西²⁾、深沢³⁾の研究があり、いずれも幾何学的考察によって力釣り合式を求めている。これら3つの研究成果には、実用上の影響はないもの、わずかに差異がみられる。同上問題を変位原理を用いて有限変位の立場から基礎方程式を求めたものに事口、中井⁴⁾の研究発表がある。ここでは微少変位理論の範囲で変位原理を用いて曲線ばりに関する基礎方程式を導いた結果を報告する。この報告の主目的は、材料力学ですでに認められている仮定のみを用い、あとは全て数学的な演算のみによって基礎方程式を導くことにあり、これによって、曲りばりの理論における仮定と、それに釣り合った基礎方程式の関係を明らかにするものである。この報告では薄肉断面で出来た円弧円錐ばりを取り扱う。基本的な仮定は(1)断面は変形しない、(2)薄肉断面構成板の中心面に直交し部材軸に平行な面でのせん断ひずみは無視出来る、(3)薄肉断面構成板の中心面内でのせん断ひずみは開断面で0、開断面ではせん断ひずみの内、直応力の変化か釣り合せん断応力によるものは無視出来る、の3つである。この第3の仮定は Bernoulli-Euler の仮定を一般化したものである。

2. 一次元問題としたときの円弧曲りばりのひずみ-変位関係

右手系の円筒座標(r, θ, z)で表わした微少変位理論によるひずみと変位との関係は次のように書かれる。

$$\epsilon_r = \frac{\partial r}{\partial r}, \quad \epsilon_\theta = \frac{\partial w}{\partial \theta} + \frac{v}{r}, \quad \epsilon_z = \frac{\partial u}{\partial z}, \quad \gamma_{rz} = \frac{\partial v}{\partial r} + \frac{\partial w}{\partial z} - \frac{w}{r}, \quad \gamma_{rz} = \frac{\partial u}{\partial r} + \frac{\partial v}{\partial z}, \quad \gamma_{xz} = \frac{\partial u}{\partial \theta} + \frac{\partial w}{\partial z} \quad (1)$$

ここに r, w, u はそれそれぞれ、 θ, z 方向への変位。

仮定(1)は次のように表わされる。

$$\epsilon_r = 0, \quad \epsilon_z = 0, \quad \gamma_{rz} = 0 \quad (2)$$

(1)を(2)に代入し積みすると

$$u = u_s - (y - y_s) \beta_s, \quad v = v_s + (z - z_s) \beta_s \quad (3)$$

ここに $y = r - r_c$ (r_c は任意に選んだ z 軸座標の原点までの曲率半径)、 u_s, v_s, β_s は積み度数であり、 u_s, v_s は任意の点 $S(x_s, y_s)$ での z, y 方向への変位、 β_s は断面の剛体回転角を表す。仮定(2)と(3)を用いるために y_s, z_s のかわりに薄肉中心面とそれに直交する面内のせん断ひずみ γ_{se}, γ_{ne} を考える。このせん断ひずみは断面の中心面に沿って取った S 座標の z, y 軸に関する方向余弦 l, m を用いて次のように表わされる。

$$\gamma_{se} = \frac{\partial w}{\partial s} - \frac{m}{r} w + \frac{\partial z}{\partial \theta}, \quad \gamma_{ne} = \frac{\partial w}{\partial n} - \frac{l}{r} w + \frac{\partial z}{\partial \theta} \quad (4)$$

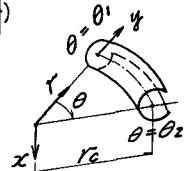
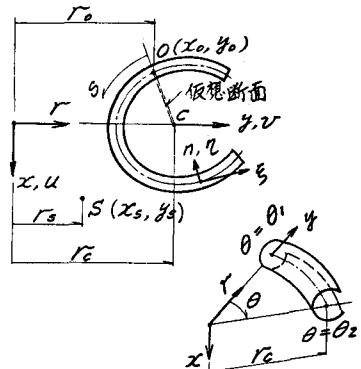
ここに s は z に直角な座標であり、 (S, n, θ) は右手系を構成する。 n, θ 方向への変位を z, θ とすると、これらは(3)と方向余弦 l, m を用いて、次のように表わされる。

$$z = u_s l + v_s m + f_s \beta_s, \quad \theta = -u_s m + v_s l + f_n \beta_s \quad (5)$$

$$\text{ここに } f_s = m(x - x_s) - l(y - y_s), \quad f_n = l(x - x_s) + m(y - y_s) \quad (6)$$

仮定の(2)から $\gamma_{ne} = 0$ 。これに(4), (5)を代入して積みすると

$$w(s, n, \theta) = r w^*/r^* + (m u_s' - l v_s' - f_n \beta_s') m/r^* \quad (7)$$



ここに W^* は積分定数であり、薄板中心面 ($S, n=0, \theta$) での θ 方向への変位を表わす。上添記号 * は板の中心面上 ($n=0$) の量を表わし、プライムには θ に関する微分を表わす。

θ 方向への力のつり合い条件は、せん断流れ $g_i^* = \bar{g}_{so}^* \cdot \alpha$ (α は板厚) を用いると次のようになります。

$$\frac{\partial g^*}{\partial S} + \frac{2m g^*}{r^*} + \frac{x}{r^*} \frac{d \delta \sigma^*}{d \theta} + \int_{-\frac{\pi}{2}}^{\frac{\pi}{2}} P_{od} d\theta = 0 \quad (8)$$

P_{od} は分布して働く外力の θ 方向成分。等断面部材では $t=t(S)$ 。この条件で (8) を積分すると

$$g^* = \left(\frac{r_1^*}{r^*} \right)^2 g_1^* - \frac{1}{(r^*)^2} \int_{S=S_1}^S \left[r^* t \frac{d \delta \sigma^*}{d \theta} + (r^*)^2 \int_{-\frac{\pi}{2}}^{\frac{\pi}{2}} P_{od} d\theta \right] ds \quad (9)$$

g_1^* は積分定数であり、 g_1^*, g_1^* は任意の点 $S=S_1$ でのせん断流れ、曲率半径である。(9)をGオで割り、仮定(3)を用いると $g_1^* = \frac{g_1^*}{Gx} \left(\frac{r_1^*}{r^*} \right)^2$ (10)

開断面では仮定(3)から $\bar{g}_{so}=0$ 、これは(10)式において、 S_1 を自由端に選び、 $g_1^*=0$ となる場合に相当する。

(5), (10)を(4)の第一式に代入して積分すると

$$W^* = r^* \left[\frac{W_0^*}{r_0^*} - \left(\frac{x^* - x_s}{r^*} - \frac{x_0^* - x_s}{r_0^*} \right) \frac{U_s'}{r_s} - \left(\frac{y^* - y_s}{r^*} - \frac{y_0^* - y_s}{r_0^*} \right) \frac{V_s'}{r_s} - \left(\int_0^s \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds \right) \left(\frac{U_s'}{r_s} + \beta_s' \right) + \frac{(r^*)^2 \bar{g}_1^*}{G} \int_0^s \frac{ds}{(r^*)^2} \right] \quad (11)$$

y_s は $S(x_s, y_s)$ での曲率半径、下添字 0 は任意の点に選んだ S 座標の原点 0 での値を表わす。 W_0^* は積分定数であり $S=0, n=0$ での W の値を表わす。開断面では仮定により $\bar{g}_{so}=0$ 、したがって $g_1^*=0$ 。開断面では開口たる一面についての W の連続条件、すなはち $W(S)=W(S+\oint \frac{\partial W}{\partial S} dS)$ に θ を代入することによって

$$g_1^* (r^*)^2 = \left(\frac{U_s'}{r_s} + \beta_s' \right) \left(\oint \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds / \oint \frac{ds}{(r^*)^2} \right) G \quad (12)$$

一般に任意に選んだ x, y 座標の原点 C は S 座標上にないので、 W は C 点で定義出来ない。(11)の積分定数を便宜上、 C 点での W を表めるために、 C 点と 0 点を仮想的な点 $= 0$ の板で結ぶ。板厚が 0 なので、このように仮想的な部分をつけててもはりの力学的性状にはなんら変化をあわせはない。 C 点での W を W_C とする。 (11), (12) から

$$W_0^*/r_0^* = [W_C - \{x_0^* + (x_0^* - x_s)(r_s/r_0^*)\}(U_s/r_s) - \{y_0^* + (y_0^* - y_s)(r_s/r_0^*)\}V_s'/r_s + Q(S_s)(U_s'/r_s + \beta_s'/r_s)]/r_s \quad (13)$$

ここに $Q(S) = \left\{ \begin{array}{l} rr_s \int_0^s \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds \\ rr_s \int_0^s \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds - \int_0^s \frac{ds}{(r^*)^2} \end{array} \right. \quad (\text{開断面})$

$$= \left\{ \begin{array}{l} rr_s \int_0^s \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds \\ rr_s \int_0^s \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds - \int_0^s \frac{ds}{(r^*)^2} \end{array} \right. \quad (\text{開断面}) \quad (14)$$

S は C 点の S 座標、添字 C は C 点での量を表わす。(11)を(13)に代入しさらに(14)に代入することによって変位 W は最終的に次のように表わされる。

$$W = W_C + (W_C - U_s' x_s/r_s - V_s' y_s/r_s)(y/r_s) - U_s' x_s/r_s - V_s' y_s/r_s - Q(S) - Q(S_s) + r_s f_m m/r^* (U_s'/r_s^2 + \beta_s'/r_s) \quad (15)$$

(15) は仮定(1)～(3)のもとで可能な変位場を表している。(15)を(1)に代入すると、この仮定のもとでの一次元のひずみ-変位関係が次のように表わされる。

$$\epsilon_\theta = [W_C + V_s' x_s + (W_C - U_s' x_s/r_s - V_s' y_s/r_s) - x(U_s'/r_s - \beta_s') - (Q(S) - Q(S_s) + r_s f_m m/r^*)(U_s''/r_s^2 + \beta_s''/r_s)]/r \quad (16)$$

$$\bar{g}_{so} = - \left\{ (1 + \gamma/r^*) (1 + f_m m/r^*) n - (r/r^*)^2 \left[\oint \frac{f_c^*}{(r^*)^2} ds / \oint \frac{ds}{(r^*)^2} \right] / (r^* t) \right\} (r_s/r) (U_s'/r_s^2 + \beta_s'/r_s) \quad (17)$$

残りの 4 つのひずみ成分は全て 0 である。

3. つり合い式と境界条件

ひずみ成分のうち $\epsilon_\theta, \bar{g}_{so}$ 以外は全て 0 であるゆえ、仮想仕事式は次のように書かれる。

$$\int_{\theta_1}^{\theta_2} \int_A (G_0 \delta t_\theta + T_{so} \delta y_{so}) Y dA d\theta = \int_{\theta_1}^{\theta_2} \int_A (P_{od} \delta u + P_{id} \delta v + P_{bd} \delta w) V dA d\theta + \left[\int_A \bar{G}_0 \delta w + \bar{T}_{so} \delta y_{so} \right] dA \Big|_{\theta_1}^{\theta_2} \quad (18)$$

P_{od}, P_{id}, P_{bd} は単位面積、角度に働く分布外力の x, y, z 方向成分、上向きの横棒は両端 θ_1, θ_2 で断面に分布して働く外力を示す。(3), (5), (15), (16), (17) を用いて (18) を変形することにより、次のつり合い式、と境界条件式が求まる。

つり合い式

$$-N' - \frac{1}{r_c} M_x' = P_x + \frac{m_x}{r_c}, \quad -\frac{x_s}{r_c r_s} M_x'' - \frac{1}{r_s} M_y'' - \frac{1}{r_s^2} T_{sv}' = P_x + \frac{x_s}{r_c r_s} m_x' + \frac{1}{r_s} m_y' + \frac{1}{r_s^2} m_\beta' \\ N - \frac{1}{r_c} M_x'' = P_y + \frac{1}{r_c} m_x', \quad -x_s N + M_y - \frac{1}{r_s} M_\beta'' - T_{sv}' = m_x + \frac{1}{r_s} m_\beta' \quad (19)$$

境界条件

$$W_c = C_1 \text{ あるいは } N + \frac{M_x}{r_c} = \bar{N} + \frac{\bar{M}_x}{r_c}, \quad U_s = C_2 \text{ あるいは } \frac{x_s}{r_c r_s} M_x' + \frac{1}{r_s} M_y' + \frac{1}{r_s^2} M_\beta' + \frac{1}{r_s} T_{sv} = \bar{Q}_x \\ V_s = C_3 \quad " \quad \frac{1}{r_c} M_x' = \bar{Q}_y, \quad \beta_s = C_4 \quad " \quad \frac{1}{r_s} M_\beta' + T_{sv} = \bar{T} \\ V_s' = C_5 \quad " \quad M_x = \bar{M}_x, \quad U_s' = C_6 \quad " \quad \frac{x_s}{r_c} M_x + M_y + \frac{M_\beta}{r_s} = \frac{x_s}{r_c} \bar{M}_x + \bar{M}_y + \frac{\bar{M}_\beta}{r_s} \\ \beta_s' = C_7 \quad " \quad M_\beta = \bar{M}_\beta \quad (20)$$

ここで $C_1 \sim C_7$ は定数を表す。その他の記号は表記の過程で次のようになる。

$$N = \int_A \sigma_{xx} dA, \quad M_x = \int_A \sigma_{xy} dA, \quad M_y = \int_A \sigma_{yy} dA, \quad M_\beta = \int_A \sigma_{xz} dA, \quad Q_x = \int_A T_{so} dA \\ Q_y = \int_A T_{sy} dA, \quad T = \int_A T_{so} \delta_z dA, \quad P_x = \int_A P_{xd} dA, \quad P_y = \int_A P_{yd} dA, \quad P_\beta = \int_A P_{zd} dA \\ M_x = \int_A P_{xd} \delta_y dA, \quad M_y = \int_A P_{yd} dA, \quad M_\beta = \int_A P_{zd} \delta_x dA, \quad M_t = \int_A [P_{yd}(x-x_s) - P_{zd}(y-y_s)] dA \\ T_{sv} = \frac{\oint \frac{J_s}{(r^*)^2} ds}{\oint \frac{ds}{(r^*)^2}} \oint T_{so} \left(\frac{r}{r^*} \right)^2 \frac{ds}{r^*} - \iint_A T_{so} \left(2 + \frac{\ell n}{r^*} \right) \left(1 + \frac{J_s m}{r^*} \right) n dnds \quad (21)$$

開断面に対して T_{sv} の第1項は0となる。薄肉断面部材で $n \ll r^*$ と想えてよいときには T_{sv} の $\frac{J_s}{r^*} = 1$ となる。又第2項は簡単化され $\iint_A 2 T_{so} n dnds$ と表される。

4. 力と変位の関係

(16), (17)式のひずみに E, G を乘じ (21) 式に代入すると、力と変位の関係が求まる。X座標の原点C, S座標の原点D, 変位の参照点S(x_s, y_s)は任意の点に選んだが、これらの点を

$$\int_A \frac{X}{r} dA = 0, \quad \int_A \frac{Y}{r} dA = 0, \quad \int_A \frac{Q_x}{r} dA = 0, \quad \int_A \frac{Q_y}{r} dA = 0 \quad (22)$$

を満たすように選ぶと、力と変位の関係式が簡単になる。(22)の1, 2式はCを定め、3式は0を、4式はSを定める。(22)を満たすように座標原点を選んだ時、力-変位関係は次のように表される。

$$N = (W_s + V_s - x_s \beta_s) EA/r_c, \quad M_\beta = -(U_s''/r_s^2 + \beta_s''/r_s) EI \delta_x/r_c, \quad T_{sv} = (U_s'/r_s + \beta_s') GJ/r_c \quad (23)$$

$$M_x = -[(U_s''/r_s + V_s'' - W_s) I_x/r_c + (U_s''/r_s - \beta_s) I_{xy}] E/r_c, \quad M_y = [(U_s''/r_s + V_s'' - W_s) I_{xy}/r_c + (U_s''/r_s - \beta_s) I_y] E/r_c \quad (24)$$

ここに

$$A = \int_A dA, \quad I_x = r_c \int_A \frac{Y^2}{r} dA, \quad I_y = r_c \int_A \frac{X^2}{r} dA, \quad I_{xy} = r_c \int_A \frac{XY}{r} dA, \quad I_{\beta\beta} = r_c \int_A \frac{\delta_x^2}{r} dA \\ n \ll r^* のとき \quad J = Gr_c \left[\left(\oint \frac{J_s}{(r^*)^2} ds \right)^2 / \left(\oint \frac{ds}{(r^*)^2} \right) - \int_S \frac{\delta_x^3}{3r} ds \right] \quad (24)$$

5. 結語

円弧曲線ばかりの基礎方程式を導く一つの方法として、変分原理を用い、つり合い式、境界条件、力-変位関係を求めた。仮定としては比較的簡単なもののみを用い、あとは全て数学的な演算に任す。幾何学的な考察を行った。ここで得られた結果を開断面に適用すると、文献(1)の結果と一致する。又開断面に対するサンプナソのねじり定数は文献(2)の結果と一致する。

6. 文献リスト

- (1) 小西, 小松, 「薄肉曲線材の基礎理論」土木学会論文集87号, (2) 倉西, 「一般薄肉曲りばかりの解析」土木学会論文集109号
- (3) 清水, 「薄肉曲線材の静力学的解析に関する基礎理論」土木学会論文集110号, (4) 事口, 中井, 「複形を考慮した曲線部材の力学的性状に関する基礎的研究」土木学会年次学術講演会概要集, 昭和47年